

三浦哲郎を通じて改めて折り直した2021年の八戸

飯田 竜太 彫刻家

[中高生に伝えたい三浦哲郎]展(2021年)にて、展示構成と短編集から作品を制作する機会をいただきました。自分にとってこの機会は[八戸]をもう一度折り直すきっかけになりました。三浦さんの短編には、八戸の様々な場面を感じることができます。小説を構成する一つ一つの文字や単語から、自分が6年間生活した八戸の記憶が結びついてゆきました。展示構成のリサーチの為、久しぶりに帰八(八戸に来訪することを来八という)し、思いでの場所を巡ると、今まで忘れていた小さな記憶が戻り、今の自分と心身的に離れていると感じました。三浦さんも東京で生活し、月に1度は八戸に戻るような生活をされていたようですが、そのことが少し理解できたような気がします。

私の職場は東京の西武池袋線江古田駅で、三浦さんの東京の住まいがある駅と同じ電車を使っています。駅も数駅しか離れておらず、同じ地域で東京を感じているのかと夢想します。三浦さんの住まいの横を流れる川はかつて自分が学生時代に通った道につながり、なんとも東京らしい風景を感じさせてくれる場所でもあります。今回の企画で、自分の生い立ちと三浦さんの状況を自分勝手(とにかく繋がる部分を探しに探すという、)に重ね合わせ、短編の機微を調べた経験は、「本を読む」という行為を改めて考え直す貴重な時間になりました。

三浦さんの著作、「みなと紀行」という本の中で「八戸、風と土と心」という、当時の八戸市公民館の館長さんが制作した写真スライドについて書かれています。今ではそのスライドがどういうものかわかりませんが、三浦さんはその紀行文を書かれた当時の八戸を「変わり果てた八戸」と綴っています。非常に精査された言葉で、中心街から白銀、湊方面への移動が綴られ、館鼻岸壁へ戻る様子が読み取れます。その風景は自分の中で「初めての八戸の風景」だと気づきます。三浦さんには変わり果てているかもしれない風景が自分にとってはかけがえのない風景になっているのです。つまり紀行文の中に二つの時が描かれどちらも当時の様子を読者から呼び覚まし、回想されている。そしてその風景を考えるだけで自分の当時の状況を呼び覚ましてくれる。

風の人(よその場所から来た人で八戸を過ぎ去っていく人のことをいう)だった自分にとって、初めて触れた八戸が、三浦さんの文中では「変わり果てた八戸」の風景として描かれている。描かれた風景は自分の風景と三浦さんの風景とは全く違うのですが、どちらも「初めての記憶」として共通した認識域を残っていることがわかるのです。これは言葉の持つ抽象性と想像性をいくつも折り直し、精査した結果の簡潔な文字列の集合であるように感じました。久しぶりの中心街は、賑やかに

人が歩き、街が生きている感じがしました。それは嬉しいことなのかもしれませんが、自分にとって何か寂しい気持ちもありました。三浦さんの小説にある、「何かおぼろげながら感じる切ない気持ち」に重なるのかもしれませんが。そしてそれは、新たな変化を実装した街が、また誰かの初めての風景になるのだろうことを示唆していたように思います。

移動と記憶の狭間で人は変化していくものだと思います。自分というモノが常に変化していると感じると長い時間も短い時間も同じように扱えるようになるようになりました。自分にできることは、「忘れないでいるということ」「誰も気づかず忘れ去ってしまうような風景、とても小さな記憶を伝えられるよう振る舞い考えること」。そしてそれはノスタルジックを郷愁するのではなく常に新しい発見を促すことでありたいと思うことでもあります。三浦さんが書き重ねた小説の多くには、常にその下地があると思ったのです。劇的なまでに削ぎ落とし、最小限にまで精査された文字の中に非常に複雑な関係が多方向に広がる。それが八戸という街の複雑さであり、三浦さんの小説の複雑さにも含まれているように感じました。頭の中で考えるイメージや思いは何か形に残さないと消え去ってしまう。いつも思い出せるように記憶しても、その記憶はその時の自分が変化してしまっているので違った記憶の呼び戻し方をされてイメージされる。だから人はモノに固執し形に残そうとするし、身体性を失わないのだと思います。自分の制作の分野である美術・彫刻という分野で、立体物を扱うとき身体性の問題は常に意識します。これからも体を使って体の外に思いを表出することの大切さ、その結果変化する自己と周囲の関係に改めて従事していきたいと思います。

自分の中の八戸は、また皆さんの中の新しい八戸になるのかと思うと嬉しい思いでいっぱいになります。

飯田竜太 ryuta iida

彫刻家

「のどの文字 間の無光」(2017)

「中高生に伝えたい三浦哲郎」(2021)など

1981年静岡県出身。2014年東京藝術大学
先端芸術表現科修了。2004年第22回グラフィック『ひとつぼ展』グランプリ。2015年より日本大学芸術学部美術学科彫刻コース
常勤講師。グラフィックデザイナー田中義久
とのNerholでも活躍。

